
うたたねろんか

哀氏るいじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うたたねろんか

【Nコード】

N4254L

【作者名】

哀氏るいじ

【あらすじ】

母の顔の病がきっかけで、天使の男と悪魔の女に出会った少年のお話

登場人物（前書き）

自然が豊かな国の小さな村。

ひとりの少年と天使と悪魔が出会ってしまう。

「かあさんを助けてください」だがその願いは、ひねくれた天使には届かなかった。

「お願いします」という震えた少年に悪魔は頷いた。

天使になりたい悪魔と悪魔になりたい天使の行く末はどうなのか。だが、そんな彼らを見守る少年は天使悪魔にとって予想以上に必要な存在になってしまった。

天使と悪魔と、子供率が高すぎるサーカス団との愉快な馬鹿話が始まる

登場人物

登場人物

かたる
語

天使と悪魔を導く少年。主人公。10歳で赤毛が特徴的なごく普通の男の子である。

一人称は僕。憂麻、風麻よりも考え方が大人っぽい上、常識人であり二人の喧嘩を止める役を担っている。

元気で包み込んでくれそうな性格は最高の長所。

誕生日は2月29日。好きなものはフウ、ユウ、りんごと風船。嫌いなものは、尖った物、頭痛。

風麻・イスデイスナ・スラート

天然まがいの白色悪魔。ホワイテデビル女で悪魔に分類される。通称、風麻。フウちゃん、強風アクマなど。

悪とは一体何なのかを追求している。近所のあだ名は『鉄砲弾』。性格はおっとりだが、早口言葉は異常に得意。本人曰く、『歩くくらいなら走る』

ちうちう、と言うのが癖。不満な時によく口にする。

好きなものは、語と唐辛子、働き蟻、微生物である。

嫌いなものは不幸と、女王蟻。

憂麻・リヴァイア・ジャックス

幸せなんかに興味ゼロ、濁った天使。捻くれているが、一応天使ということになっている男の天使。

通称：憂麻、ユウちゃん、Youちゃん。風麻にはよく、『野郎な君』と呼ばれる。

空気を読むことが得意で、力とか抜きで人の心が直感的に良く分

かる。

『歩くくらいなら座る』。壊れた楽器を何故か常に持ち歩いている。下ネタが苦手で赤面が多い。

好きなものは、語、アイスクリーム、楽器。嫌いなものは、笑っている人と馬鹿な悪魔。

てれら
照羅

語の肉親であり姉的存在感を放つ赤紙ロング娘。19歳のO型。

ある1日

ごほん。僕は釈然としない思いのまま咳をした。

ここは砂の国。

砂の上に佇んだ建物が窓からひっそりとのぞく。

「語、ごーはーんー」

この声は悪魔であるところの、風麻・イスデイスナ・スラートである。

彼女は確かに悪魔であつたが、どこかに天使要素を含ませているかのように思われる。

癖毛の白髪頭の帽子を取る。

歳は人間で表すと、十代半場か後半といったところである。

「わかつたけどフウちゃん、待ってつて」

今、急いで作っている最中であり、照羅^{てれら}さんが改造したトラックのキャンピングカー内部の台所で突っ立って手を必死に動かしている。

照羅というのは語の姉的存在の従兄弟にあたる。彼女は語より9歳年上の19歳だ。

もう結成一週間になる、ここ『angelio caduto』アンジェロカデウト。サーカス団は人数4人の小さいものだ。

照羅のもとと勤めていた小会社から、トラックを貰い改造して今は旅するサーカスである。

去年までは定住して暮らしていた語だが、もう村もない。

「待てないー」

すぐ向こう側で椅子に座り、ホークとナイフをカチカチさせている。

「うるさいな、強風女が。おれが今勉強中なのが見えないのか？」

別のところから声がする。これは、このサーカスの天使さん。

憂麻^{ゆうま}・リヴァイア・ジャックスという真っ白な格好の少年だ。

ちなみに『強風女』とは、風麻のことをさすらしい。二人とも良く似ているが、対面したのは2週間前、僕が呼び出してしまったことによる。

1ヶ月前、サーカス団を作った。理由はいろいろある。

そんなちよつと前のことを考えつつ、語は卵をフライパンに落とす。サーカス全員の朝食を作っている語にとって、卵は手頃な存在だ。もちろんサーカスの動物達のごはんも語が担当している。今のところ、犬が1匹虎が1匹いる。

大型トラックに強引に住んでいる。天使の憂麻と、悪魔の風麻、照羅、そして語。

憂麻は、羽ペンをゆらゆらと揺らし眉間にしわを寄せて何か紙を凝視している。彼はいつもトラックの上のいて、暇があれば書き物をしている。

ガヤガヤ言っていた風麻が自分の上ふきんを見て言った。トラックの上に向かつての声だ。

「youも、一緒に『ごはん、ごはん!』って語にちよつかい出そ

「うよおー」

そう言ったとたん、屋根がガタツと揺れてホコリが落ちてきた。今から朝食なので、あまり騒ぐのは止めて欲しいんだけど・・・。

でも、それもいつものことであるので今更いちいち突っ込んでもいいられない。

「何回も言わせんな。お前なんかといったら悪魔がうつるんだよ悪運が！それにおれは狭いところは・・・」

怒鳴りながらも、ちゃんと返事をする憂麻は閉所恐怖でトラックの中には絶対に入ってこようとしない。

いつもトラック上部で、サーカスの一員である檻に入った動物陣の横に胡坐をかいて座っている。

そんな憂麻も最初は無口で何もしゃべろうとしなかったのだが、これは進歩なのだろうか。

憂麻には最初、殺されかけた思い出がある。間違って呼び出してしまったときに、他の天使をけしかけて殺されかけた。

本当は違う天使に頼もうと思ったのだが、何せ語は素人だった。もうそれも過去である。

あのときは母のことで僕はずっと泣きっぱなしだった。鮮明に記憶している。

「かーたーるー」

憂麻に相手にしてもらえないので、また語の方を向く。陽気な彼

女は悪魔の黒服をヒラヒラさせる。

今もまだ、憂麻は心を完全に開いてくれているわけではなかったが、語は母を失ったあのとき嫌嫌ながらも側にいてくれた憂麻。

たとえ、召喚の呪縛から逃れるために僕を付けねらっていたただけだとしても、それでもありがたいと言いたい。

僕はなんだかんだで、ここ2週間を共にしている憂麻と、ほわほわして何故か良くアドバイスをくれる風麻に感謝している。

「フウちゃん。もう少し、今日はフウちゃんの為に、おかず1品増やしてるんだ。待てないのなら、しりとりしようよ。ね、うるさいと照羅さんが起きてしまうし」

語は後ろを振り返りつつ言った。

「語！まえまえ！！」

「あ、うん」

卵の焼き加減の調整に戻る語の小さい手。

「じゃあ、私からイイ？えつとね、りりり？『り』でしょ？これ人間の言葉遊びだっけ・・・りりり・・・バナナ」

言ったとたんナイフがキーンとホークに当たる。

「惜しい！」

「ちがう？・・・そう」ガーンと、頭を抱え顔を蒼白にする。

相変わらずフウちゃんを見てると和むなあ

ナイフをサツと洗って、パンを4等分に切る。
ジャムは・・・何味にしよう。全部の味をテーブルに出しておこうかな。

「うーん・・・・・・・・・・・・・・・・」

椅子に座ったまま、脚を組む風麻。

「がんばれ、フウちゃん！」

暫し頭を捻り、

「すいか」

「惜しい！」

「チェリー」

「惜しい！」

「ぶどう」

「惜しい！」

「バナナ」

「二本目！」

「きゅうり」

「惜しい！・・・けどちょっと離れた」

「キャベツ」

「今、野菜高い」

「オレンジ」

「そう！近づいてきたっ」ついつい語のテンションも上がる。

「もうひといきだよ！」語は振り返り、風麻を見た。

“みかん”や“メロン”を言わない辺り風麻も頑張っている。

風麻は脚を組みなおし、椅子に深く座り直した。
その反動で少し椅子がずれる。

「マスカット」

「そう、近い近い！！！」

「なし！！」

風麻は椅子を少し前へと、ひいた。

「おお、すごく惜しい！！！！」

「リクライニングチェア」

「……………肩揉むから、その椅子で我慢してお願い」

そのまま変な調子で4分が経ち、テーブルに朝食をずらりと並べ終わった。

コンコン

「照羅さん、ごはん出来たよ」

照羅の為に区切られた空間のドアをノックする。

むくつと起き上がると、寝起きの髪をセットした照羅が出てきた。今日は彼女が希望したのでトラックを1歩でたところで朝食をとることになった。

「風邪がきもちいいね」

照羅がわざとらしく言うつと、トラック上に胡坐をかいていた憂麻がチラッとこつちを見た。

彼の話によると、天使悪魔は普通食事をしないらしいことがわかった。人間で言うギャンブルのような娯楽的存在らしいのである。

「あの、照羅さん。ユウちゃんは嫌いなんだ食べ物。呼んでも無駄なんじゃ・・・」

照羅は指を立ててチツチツチと言った。

「だいじょうぶ。何の為にいちいち外で食べると思ってたんだ。あいつがトラックに入れないんじゃないや仕方ない。あたしらが行くまでよ」につこり笑った。

すごい・・・照羅さん。

急に嬉しくなった語は朝食を板に乗せて、カンカンと梯子を上っていった。後ろから、照羅と風麻が登ってくるのが見える。

今日も砂が道路に積もっている。北の方では白くて冷たいものがよく空から積もるといふが、ここの国は砂なのかな、とそんなことを語は思った。

黄金色に輝く砂の上に車が走れる道路があり、レンガ造りの家が立ち並ぶ。

目の前の噴水が綺麗だった。

語は転げ落ちないように鉄パイプにしがみつき、ドキドキして下を

見る。

高いっ

流石は大きな車である。語くらいはものともしない見事なボディを光らせつつエンジンをブルンブルン言わせている。

「何しにきた」

憂麻は鋭いブルーの目をこちらに向けた。騒がしくなったので、左手に持ったままの羽ペンが動きを止めて固まっている。

怒っているのかどうなのかはよくわからない。憂麻はいつもこんな調子なので、彼の機嫌をとればよいのかどうなのか、迷いどころである。

「じはん」

たった今、何回も転びながらも上がってきたと思われる、ヒラヒラした黒服の風麻が迷わず答えるのを見て、語は開けかけた口を閉ざす。

「.....」

すると、憂麻は立ち上がり、動物の檻に立てかけてあったピアノ型の手持ち楽器を持ち上げると、スッと飛んだ。

「ユウちゃんっ！！！」

語が言うと、片手にご飯を持ってゆつくりと登り、梯子に捕まっている照羅が続けて言った。

「降りるなっ！……って檻いいいいいいいい！！！！動物はどうした！？え！？高かったんだぞ！！！！」

憂麻の方に氣をとられていた語が檻を見やると、そこには鍵がボロボロになり血がたくさんこびり付いていて、肝心の動物はいなかった。

憂麻が知らん振りを続けて、道路の脇をスタスタと歩いて行くのを見て語は急いで梯子を降りる。

カンカンカン

梯子を調子よく降りて行き、最後の段を飛ばし、砂の上に音もなく着地した。

「僕が追っ……！！！！ユウちゃんも行くところないんだから戻ってくるよ……」

「ばっかああああああああああああああああ！！！！虎を追え虎を！！！！あっちあっち！！！！」

語の特性卵焼きと、煮魚、真っ白なパン握り締めている照羅が叫ぶ

が語はそんなことは聞いてはいない。

憂麻の足は徒歩にも関わらず意外に速く、突き放されそうだったので自然と語の足も走っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4254/>

うたたねろんか

2010年12月19日02時20分発行